Japanese Association of Educational Psychology

シンポジアム 3　正しい学力評価のあり方

発表要旨

大阪市四教科診断テストの立場から

南　武雄（大阪市立曾根崎小学校）

大阪市では，大阪市教委監修指導，大阪市小学校教育研究会作成の四教科診断テスト（国語・社会・算数・理科）を毎年実施している．大阪市の全児童が参加し，創始以来15年を閲し，その目的は不変で，常に現場より生れ現場にかえって行くところに，その特色がある．

1）目的．① 児童の学力を診断し，その学年での学習効果の評価に役立てる．② 大阪市全児童の学力の実態を把握し，指導上の問題点の究明，教育課程の改変や指導法の改善に役立てる．

2）方法．① 各教科各学年の指導要領の目的内容を領域別に分析し，基本的内容をもらさず，学年間の系統を考慮し，綜合的学力評価をねらう．② 各教科各学年50問，約45分（算数は90分）．③ 二回の予備テストを実施．④ 毎年二月上旬までに実施．⑤ 全市252校より標本抽出の学校，学級を決定し，統計処理の対象とする．

3）処理．学級では通過一覧表を作成する．各研究部では，① 学級単位における問題ごとの正答率，領域別正答率を算出．② 大阪市の推定正答率によりプロフィールダイヤグラムを作成．③ 各問ごとの学級平均点の分布ヒストグラムを作り，中心的傾向，分布巾，分布型の分類をし，学級差指導の徹底度，指導内容や問題自身の適否検討，指導対策を立てるのに役立てる．④ 綜合得点の分布と五段階評価基準の決定．⑤ 類似問題の学年正答率の比較．⑥ 抽出学級答案による誤答の分析(指導法の改善に役立てる)．

4）結果の報告．① 三月上旬，速報により現場の全教師へ，② 五月，診断テストまとめの発行，③ 研究会や研究授業により，問題点の究明，④ 現場におけるテストの活用により，全市的立場で評価の適正が期せられる．

授業分析の立場から

森　喜義（大阪市教育研究所）

一般に授業は指導と評価とが交互にくりかえされながら進められるものである．この評価の内容は多岐にわたるが，とくに学力にかかわる評価の占める比重は大きい．そこで，授業の「学力評価的な機能」をどうとらえ，これを子どもの学力評価や学習指導にいかに生かすかは現場教育改善の一つの着眼点であろう．

大阪市教育研究所では，数年前，「フィルター方式による授業分析法」を創案したが，このフィルターがとらえた授業記録によると，授業における学力評価の推移が，それなりに明確につかむことができる．すなわち，この記録は，教師がどんな内容を，どんな順に発言しながら授業を進めていったかがわかるとともに，学力の評価という観点からも興味ある事実を示しているのである．とくに「求めるもの」「たしかめるもの」に属する発言は，子どもの考え方や作業能力あるいは経験や知識などの実態をたしかめる発言であると見られよう．そこで，この研究では150例の授業における教師発言を分析すると，全発表の約55％が評価に関するものであった．しかも内容的には，たんなる知識や経験の点検から，作業能力，概括力，応用力など，学力の中心的な面にまでわたっていることがわかった．

しかし，各発言類型別のユニット数には，かなりの片よりが見られる．すなわち作業や意見を求める発言や，経験・知識・理解を点検する発言にくらべて，概括・応用・定義を求めたり，態度を確かめたりする発言は少ない．つまりこれら少ない項目にあたる学力は，授業では充分に評価されていないことになる．

以上，授業が子どもの学力評価に関して果たす機能を授業の分析記録から見てきた．授業の目的は指導にあるわけであるが，指導と評価とは一体のものであって，これを二元的に見るのは正しいとはいえない．

教育課程の設定の立場から

板倉聖宣（国立教育研究所）

学力評価について論ずるためには，まず学力なる概念をあきらかにしなければならない．筆者は「学力とは，教育目標として設定された知識・技能の達成度を計量したものである」とするのが最も適切であると考える．この考えは，「教育目標というものは，その評定の方法を具体的に規定することによって，はじめて実際的な効果をもつものである」という考えを前提としている．教育目標がかわれば学力評価の仕方も異なってくる．そこで，「ある学力評価が正しいかどうか」は，二重の意味

NII-Electronic Library Service